

◇◆慶應義塾大学大学院経営管理研究科（ビジネススクール）
「実践的授業方法について考える」ニュースレター（第20号・2008/8/29）◆◇

ニュースレターの第20号をお送りします。今月も東京海洋大学名誉教授・同大学院海洋科学技術研究科特任教授 渡辺尚彦先生の実践的授業取組をお届けします。今月は、ケースメソッドと出会った渡辺先生がケース教材の開発に着手し、授業法セミナーにも参加しながら、ケースメソッド授業を東京海洋大学で実現していた様子をご紹介します。

コンテンツ

本号のお知らせ
(イベント情報などをご案内します)

実践的授業法取組紹介
(実践教育に鋭意取り組まれている先生方の手記を掲載しています)

ショートエッセー
(実践的授業方法に関するエッセーを掲載しています)

□■□本号のお知らせ.....

今年度の「ケースメソッド教授法」にたくさんのお申込をいただき、ありがとうございました。
本年度の受講申込は締め切らせていただきました。

.....

慶應義塾大学大学院経営管理研究科ケースメソッド授業法研究普及室では今年度の後半に、ケースメソッド授業の実践に関する研究集会とシンポジウムを計画しています。現段階の構想では、大学学部教育や大学院教育にケースメソッド授業を導入した最新の事例を紹介しながら、その導入上のポイントを探る場として開催したいと考えております。これについて読者の皆様のご意見をお寄せ下さい。

.....

慶應義塾大学ビジネススクールのホームページからニュースレターのバックナンバーがご覧いただけます。
こちらからどうぞ。



http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/gp_news.html

.....□■□

□■□実践的授業法取組紹介.....

このコーナーでは、大学教員による実践的授業方法への先存取組を「私の履歴書」風に紹介してまいります。今月は食品流通安全の領域での実践的教育でご活躍されている東京海洋大学の渡辺尚彦先生の第2回をお送りします。

～海洋大でのケースメソッド～

東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科
大学院教育改革プログラムコーディネータ
特任教授 渡辺尚彦

【第2回】ケースメソッド導入に向けた私の歩み

前回紹介したとおり私たちは4年前にケースメソッドと出会い、以来それを自分たちのものにするために試行錯誤を始めた。数々のトライアンドエラーを経て、私たちの取り組みは文科省から補助金を受けた現代 GP プログラムで行った「食品流通の安全管理システム専門技術者養成コース」、そして、その後設置されることになる食品流通安全管理専攻[博士前期課程]での授業方法に結実した。

私たちにとっての最初の課題は、自分たちの教育ニーズに合ったケースがないことだった。経営学分野で食品産業を取り上げたケース教材は若干存在するが、食品流通安全管理分野のケース教材は世の中になかった。そこで、食品流通安全管理分野のケース教材を自分たちで作成することとした。

幸運なことに、慶應ビジネススクールの出身で、自ら食品産業についてのケース教材を書き慶應大藤沢キャンパスで授業にも関わっておられた小川美香子さん（現在は本学海洋科学技術研究科助教）に直接教えてもらいながら一緒にケースを作ることができた。

1つは、雪印乳業(株)低脂肪乳食中毒事件である。現代 GP プログラムの学外委員になっていただいていた日和佐信子氏が雪印乳業の社外取締役をなさっておられるのでいろいろ資料を見せて戴き参考にした。低脂肪乳食中毒事件の発生時の会社の対応の悪さを問題にしたケース（雪印乳業株式会社 A～D）と、大樹工場で毒素が混入した粉乳を出荷してしまった真の原因を探るケース（雪印乳業株式会社 E）ができた。

2 つ目は福岡市の中心街にある高級ホテルやレストランなど、食品衛生管理の優等生と思われる施設で多発したサルモネラ食中毒事件に際して保健所のベテラン係長が奮闘した物語をケースにした。作ったケースを使って2年にわたって現代 GP の学部および大学院の授業を行った。学生も教員も慣れないディスカッション授業であったが、学生には大変評判がよい授業となった。

ちょうどそのころ、前記の小川さんから、慶應ビジネススクールでケースメソッド教授法という授業を学外者も取れる形で開講しているという情報が持たされた。幸い大学院教育改革プログラムが採択されて教員の授業研修として受講料を出せることになり、参加させていただいた。

この授業で私が学んだものは、

1. ケースメソッド授業は、Participants Centered Learning であり、学生が自分で成果を掴む機会を提供するものであること。
2. 授業の究極の目的は、自分の「考え方のモデル」を拡張する機会を与えること。
3. ケース教材は討論の切っ掛けになりさえすればなんでもよい。たくさん情報が盛り込まれているものである必要は特に無いこと。長いケース教材の場合は、一気に読めるように作ること。

この授業を通じて私はケースメソッド教育の本質を得たように感じ、聞きかじりによって積み重ねられて出来ていた、ケースメソッドはこうでなければならないという枠がはずれ、自由に授業を作っていくといいんだと思うようになった。

そのとき私は、当時担当していた学部1年生を対象とした物理学の授業にもケースメソッド的手法を使ってみたくなった。うまくできるような気がしたのである。このときの私の問題意識とチャレンジの動機を先に記しておこう。

私の所属する食品生産科学科は理科系なのだが、入試に必要な理科の科目を1科目にして受験生の負担を軽くすることで受験者数を確保し競争率の低下を防止しようとした。後に2科目に改定したが、当然の付けとして、入学者の中に高校で物理を履修しなかった者が70%から90%に及ぶという事態を招いた。

食品の取扱には加熱調理、加熱殺菌、冷却・凍結貯蔵という重要な操作があり、その基礎的理解に物理は必要だということで、大学1年生に教養レベルの物理学を必修として課している。この物理学の授業を私は永く担当してきた。物理に苦手意識を持ち、高校でも選択しなかったという多数の学生と、わずかではあるが大学入試科目として物理を選択して合格した者とを一緒にして、大学で物理学をどう教えるのがよいのか。永い間、大学の教養課程担当の先生が悩んだ問題であった。

学科の同僚の多くは、高校レベルの物理を教えて、ニュートン力学の典型的な易しい問題を解けるようになってくれればよいと考えていた。しかし私はそうしなかった。物理の易しい問題の解き方を機械的に暗記することは、コロンブスのアメリカ大陸発見の年を暗記することと何も本質は変わらないと思うからであった。

私は、ニュートン力学の考え方を教えることにした。ニュートン力学の考え方は易しいものではなく、日常生活者の直感と反するものであり、ニュートン以前の賢人たちが思い至ら無かったものである。従って、大学入試を物理選択で乗り越えた者でも、解き方を覚えているだけの場合が多く、易しい問題に少し手を加えると「考え方」をじっくり考えないと分からない問題にすることができる。逆に、始めから順を追って教えれば高校で物理を履修しなかった者でも十分に理解できる。そういう授業を数年かけて作ってきた。それをケースメソッドで行うというアイデアを思い付いたのである。

次回、その実践型がどのようなものになったのかを紹介したい。

.....□■□

□■□実践的授業方法ショートエッセー.....

このコーナーでは、実践的授業法取組で紹介した内容を、ショートエッセイ形式で解説しています。

第19回

ケース教材に具備させるべき条件

「ケースメソッド」という言葉は、「ケース」と「メソッド」の2語による合成語である。「メソッド」の前にある「ケース」という語は教材の種類を示しているので、教育の方法上の特徴として、教材のタイプに焦点を当てている言葉だという語感が強い。

このように「ケースメソッド」と言うと多くの場合、まずクローズアップされるのは「ケース」という教材の存在である。ケースメソッド授業を実現させようと決意した先生方にとって、最初に直面する課題はケース教材の獲得であろう。ケース教材をどのように調達するか。多くの先生方の意識と関心はたいていそこに向かうが、自分たちの教育目的にうまく合致するケース教材が見つかる確率は低いので、「それでは作ろうか」ということになる。

これまでも多くの教育プロジェクトが、ケース教材の作成に大きなコストと労力を投入してきた。しかしながら、そのすべてが成功に至ったわけではない。成功したかどうか、すなわち、プロジェクトが授業の実践にたどり着き、そこで狙った教育効果を得たかどうかの分かれ道は、「ケース教材の開発」と「ディスカッション運営技術の獲得と向上」が、そのプロジェクトの両輪として扱われたか否かであると、筆者は考えている。

エッセイを拝見する限り、渡辺先生もケース教材の作成から着手された。しかし渡辺先生は、比較的早期にディスカッション運営技術のあり方に触れ、それがきっかけになってケース教材が持つべき基本スペックを再考された。このプロセスがその後のケース教材開発を効果的なものにしたし、ラクで楽しい作業にもしたはずだ。海洋大の成功要因をひと言では語れないが、両輪が回り出した効果は大きかったと推測する。KBSの「ケースメソッド教授法」も少しはそれに役立ったらしい。

渡辺先生はケースメソッド教育のインストラクターとして、この授業方法についての深い理解をお持ちの方なので、「ケース教材は討論の切っ掛けになりさえすればなんでもよい」と歯切れ良くズバットおっしゃる。まったくその通りなのだが、少々要約度が高い表現なので、読者がこのコメントを楽観的に受け取り過ぎないように、ここで少し補足説明をしておきたい。

ケースメソッドで学ぶ学習者の能力を高めるカギは、ケースという教材のタイプそのものにあるのではなく、ケース教材がきっかけになって動き出すディスカッションにある。ケース教材はあくまでもディスカッションの誘発剤であり、起爆剤である。ケース教材の基本機能は、狙った論点に焦点が当たるようなディスカッションを形成することにあり、ケース教材の記述内容を学ばせることではない。

ここからは「学習成果物」という言葉も用いて説明を続けると、ケースメソッド授業における学習成果物は、ケース教材の記述内容そのものではない。この授業方法における学習成果物は、ケース教材が誘発したディスカッションを通して、学習者の意識下で醸成される知見である。したがって、ディスカッションは学習成果物の源泉にならなければならない。そして、学習成果物の源泉を形成する仕掛けを、ケース教材は担わなければならない。このような全体感が持てると、ケースメソッド授業で教育効果が発生するメカニズムは理解しやすい。

渡辺先生も一度はそう思われたという「ケース教材にたくさんの情報を盛り込まなければ」というプレッシャーを、事例研究に慣れている大学教員は抱えやすい。しかし、ケースメソッド授業で使用するケース教材の基本機能と基本性格は、ケーススタディ(事例研究成果物)のそれとは異なる。この点については、本ニュースレター第1号「「ケースメソッド」の定義と「ケーススタディ」との違い」を参照いただきたい。

ここまでの説明で、「討論の切っ掛けになりさえすれば」が何を意味するかが、ある程度は詳述できたと思う。「なんでもよい」とは言え、ケース教材には狙った論点でのディスカッションを喚起するための基本構造が必要であり、その構造を支えるコンテンツとしての基礎情報は欠かせない。ケース教材に記載する情報の取捨選択は、狙ったディスカッションの誘発に寄与する度合いに照らして行う。

筆者が考える理想的なケースメソッド授業導入プロセスは、ある1コマの授業について、「訓練主題を設定する」「ケース教材を書く」「ディスカッション設問を設定する」「授業を試みる」「設問やディスカッション運営を改善する」「ケース教材を改善する」「訓練主題を昇華させる」というサイクルをなるべく早く一回転させるというものである。

ケース教材に具備させるべき条件が明確に見えてこないうちにケース教材を量産してしまうと、後から修正作業に追われて苦しくなるか、作られた教材がお蔵入りする。ケース教材の開発には大きな労力とコストを伴うので、それがムダにならないように、過度に先行させずに、授業運営方法への理解との見合いで進めるのが安全だろう。

（文章 竹内伸一）

.....□■□

このメールマガジンは毎月1回発信しております。

.....

○お問い合わせ先

慶應義塾大学大学院経営管理研究科
ケースメソッド授業法研究普及室（高木晴夫研究室）
kbsnewsletter@info.keio.ac.jp

○慶應義塾大学大学院 経営管理研究科ウェブサイト

<http://www.kbs.keio.ac.jp/>

○慶應義塾大学大学院 経営管理研究科 文科省特色GP事業ウェブサイト

<http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/index.html>

.....

発行者 高木晴夫

編集者 竹内伸一、住吉みどり、河井純子

次号（第21号）は2008/9/30にお届けする予定です。

ご意見、ご感想、購読者のご紹介は kbsnewsletter@info.keio.ac.jp 宛に、また、メール送信先の変更を希望される方、購読を希望されない方、購読を中止したい方は、お手数ですが kbsnewsletter@info.keio.ac.jp までご一報ください。次号発信日の前日までのご連絡に対応させていただきます。

当メールマガジンの内容を転載する場合は、ご一報ください。